

詩誌
極微

ShiShi - Kyokubi

佐野 豊
小田原慎治
篠田翔平
森田 直

TAKE
FREE

第6号

詩を読む

荒川洋治の詩「石頭」について

詩・お見合い

港野喜代子を読んだ日

詩・落ちる

ぼくの、松下育男小論③

詩・折鶴

シンメトリーの生成——三橋聡・菊池千里・福田和夫

詩・姿

詩誌 極微
vol.6

評論	荒川洋治の詩「石頭」について（小田原慎治）	2
詩	お見合い（小田原慎治）	14
評論	港野喜代子を読んだ日（森田直）	16
詩	落ちる（森田直）	28
評論	ぼくの、松下育男小論③（佐野豊）	30
詩	折鶴（佐野豊）	36
評論	シンメトリーの生成——三橋聡・菊池千里・福田和夫（篠田翔平）	40
詩	姿（篠田翔平）	64

荒川洋治の詩「石頭」について

小田原慎治

一

これから荒川洋治の詩作品「石頭」について、考えたことを書く。

二

この詩への愛着を他人に説明をしてみたい。書いてみたい。

そうして書き表してみたものを自分で読み、ああ自分が感じていたことはそういうことだったのかとわかるかもしれないから。「石頭」への愛着は、何かいいな、という程度のものだが、詩集を読み返すたびに、「石頭」の様子を確認する(変わっているわけではない

のだが)程度には、惹かれているのであり、気になり続けている作品なのである。

いままでこの作品の感想を言葉にしてみたことはない。どこにどんな風に自分が惹かれるのが整理できていないし、しつかり考えたこともないからだ。時間をかけて考えればわかるのかはわからない。詩作品「石頭」を初めて読んだ時から二十年弱の時間がたつたが、この詩がわかったという気はしない。ただ読んできた時間によって、親しいものになった気はする。

これから書くことは詩の感想なのだが、私自身のこの詩への「愛着を他人に説明を」する意図があるので、それに役立つのではないかと考えたことは、ぜんぶ書いていく。愛着について、自分の思い込んだままの気持ちを取り出す部分は、冷静さを欠いてよみづらいか

もしれない。その部分は改行して●を文頭に置いて示しておく。是非読者各位のご叱正を期待したい。

の茱萸』の表記による。ただし改行位置は文字組の都合上変更している箇所がある)

三

荒川洋治の「石頭」は、一九九九年一月号の「ユリイカ」に発表された。(のちに『空中の茱萸』(思潮社・一九九九)、『続続・荒川洋治詩集』(思潮社・二〇一九)にも収録)

詩「石頭」は、特徴のある三つの形式を持つ。

(「石頭」第一連)

- ① 前半と後半で詩が切り替わる(調子の変わった別の詩になる)
- ② 切り替わる際に作者からのアナウンスが入る
- ③ 前半と後半は関係がないよううて関係がある

四

詩は次のように始まる。(以下作品の引用は『空中

「ウー・ラッ」という登場人物の名前や「深い緑」「どす赤い声」などの色彩から、東南アジアの国が浮かぶ。三人称で個人的なしぐさが描かれる小説のような記述だが、この短い連だけでも、受け取る印象は複雑だ。

詩を読むとき、多くの人はそうだと思うが、私は一

行ずつ先頭行から読んでいく。そしてどこかのタイミングで、その詩が準備している世界の広さや奥行きを感じ取るのだと思う。詩によっては、読者は詩を読むことを途中で切り上げても、最後まで読んだのと結果的に変わらない世界を感じ取る、ということも可能だろう。(詩を作るときは注意したい点でもある)

ただ「感じ取る」のは読者自身なので、感じ取れない場合もある。わからない、という感想。わからない、にも色々ある。ここでは例えば三通り挙げてみる。

- a わからないが、取るに足りないことはわかる
- b わからないが、今後も自分の人生にかかわりのない世界観であることはわかる
- c わからないが、自分にとってきわめて大切な問題を含んでいることがわかる

詩「石頭」は私にとってはcに該当する。なぜそう感じるか。

詩文の書き表され方に、ある種の態度を感じ、それ

に私が打たれているからだと思う。詩を読むたびに私の立場を揺さぶってくるような怖さも感じる。

第一連に書かれていることは何だろうか？一語ずつに詩の高まりを込めるような、または、一行ずつの区切りで詩をうねらせていくような、作られ方はしていない。

●もっと我慢強く、辛抱強い時間が流れている。慌てない。それで詩が終わってしまったら、この詩はここまでだ、というような気持ち。昼日中に、まだまどろんでいる私自身のようなウー・ラツ。夜遅くまで起きて、朝が来る寸前に眠り、昼間気怠く起き上がる行為を、俺もしたことがある。すこし後ろめたいような気持ちで。慌てない。慌てたところていつたいたいがどうなるというのか？ウー・ラツの気持ちは知らないが、この詩は俺のことを知っている？

詩は続く。以下の引用は、前半部分のすべて。

英語の黒い家があちこちで生まれ続け
ウー・ラツも黒い屋根にみずから閉ざされる

国民的作家である彼は

玄関から

出れない彼だった

いくつもの詩文が発表されていたが

それらは生活、身の上、法衣を述べて人のかけらもなかった

「英語はハイネを伝えなかったようだ とりわけその変節を」

同じようなありきたりの

色づかいの月が

砂空に上がり

どうかすると自分の信条に反して

「固くなった。もう固くなった。このようにいっぱい多くの月がいまの人間によってさかんに描かれるということとは自分の月はまちがっていで、いっぱい見かけるあのよう静かな、みだら

な月でいいのではないか。もう固くなった。固くなった。そのような月ばかりでこの世界は続けられるのかもしれない」とまで思い
玄関から外へ
出ることができなかったのだ

「きれいな月ですよ」と

近くの婦人が外から声をかけた

「ああ、ほんとうにきれいな、月日だと思う」

と彼は述べて 石頭を

月へ向けた

■以上の反戦詩「石頭」は公表に際し、次のような好戦詩「石頭」に切り替わる

(「石頭」前半部分)

詩「石頭」を読んだとき、前述したように、そのわからなさには（『C』分類なので）強烈に惹かれた。だから誰か詳しい人に、この詩が言おうとしていることを聞きたいと思った。でもこうも思った。この詩を、たとえば作者本人がこれこれこういう意味なのだ、と説明したとしても、この詩をじかに読んで受け取るものの大きさほどは受け取るものは少ないだろう、と。

●ながいながい第二連。なぜこういう語り方なのか？「彼」はウー・ラツ。国民的作家。英語の黒い家から出れない（玄関までは可）。これは事実なのか。自分の知らない史実なのだろうか？ハイネ、はあのハイネだろうか。ドイツの詩人。どんな詩を書いていたかを知らないが、そういえばどんな詩を書くのだろうか？中野重治がやたらにハイネについて書いていたのは何かで読んで知っている。でもなぜ中野重治はハイネについて書いていたのだろうか？（ハイネの）変節」と

は出る必要もない。外へ出ることは戦うこと。自分の月は間違っていないと言ってみること。戦わない。それがウー・ラツが選んだこと。この詩の前半で書かれていることである。

●意味を追えばそれらしく聞こえる。でもこの詩にはまず「態度」があり、それがもつとも肝要だと思う。この内容は、その「態度」なしには語れない。本当に思っていることを書く姿勢のようなもの。書かれた事柄がどんなに荒唐無稽なホラ話だったとしても、ああこれは本当だ、と感じることがある。反対にどんなに本当らしい話でも、これは嘘だ、と感じることがある。気持ちは見えないから、本当か嘘かどうかでもない人もいるかもしれないが、俺には大事なことだ。書かれたことに嘘があるのなら、そういうものをいっばいみかけるようになったのなら、俺はだんだん物を読まなくなっていくだろう。

はなんだろう？俺が読んでるのはなんだろう？自分の知らない何かが目の前に置かれてここにある。

人のかけらもなかった

という書き方に「態度」を感じる。

人のかけらもなかった、という言葉を書くことには

人のかけらがある または

人のかけらがあった 状態が浮かぶ

ウー・ラツは、自分の信条に反して「自分の月はまがっていて、いっばいみかけるあのような静かな、みだらな月ではないのか。」と違って、玄関の外へ出られなかった。そして外から「きれいな月ですよ」と近くの婦人から声がかかる。彼はこういつて答える。「ああ、ほんとうにきれいな、月日だと思う」。彼（ウー・ラツ）のこのセリフからは、投げやりではない決意を感じる。彼はこのとき、「みだらな月」へ体を預けた。自分がこだわっていたこと、気になっていたことは、それらの月日は、受け入れることでした。ちどころに解消する。戦わないこと。もう玄関の外へ

六

以下は後半部の好戦詩「石頭」。

日本の秋

深夜の教育テレビで

ある小学校の児童たちが

夏休みにアルバイトをしたときのようにすが報告されていた

幾日かケーキ店でエプロン姿で働いた二人が

NHKカメラの前で

「アルバイトの感想」を述べる

小学五年生の 太郎くん（日本の児童）

小学六年生の 辰子さん（一九世紀末ビルマの詩

人・背が高い）

二人は横に並ぶ

まずは太郎が

「お客さんにケーキを渡すのにてまどつてしまつて、変な顔をされてこまりました。でも実際に

いろいろとやってみて勉強になりました。学校ではあんまりできないことなので毎日楽しかったです。もつとしていたい、と思いました」(ペロツと舌を出す)

次に「背の高い」辰子に

カメラが向けられるという瞬間

太郎は

辰子のほうを見た

(下からのぞきこんで、にっこりと)

それは

「ぼくは話をしたよ」という顔

それは

「ぼくは話したよ。君はどう思ったの」という顔
余韻を引きずり、いくらか紅潮したその表情は
空を描きかけた流星のように止まっていた

「ぼくはすんだ。今度は君だよ。どんなふう、だったの？」

ちいさいときはいつも こんなふうにつながっているものだ

辰子は 答えた

「ビルマではこの夏も貸本屋のアルバイトをしました。

どこかのおじいさんがウー・ラツの本を借りてきました。

今度は作家ウー・ラツ本人が奥さんの袋に入れて借りにきました。月が輝いているのでした。口のない毎日でした。でもわたしはいまはそこにはいない

わたしがいろんなことをして ちいさな

石頭になるまでは」

(太郎とはまた その隣りで過ごしたい

わたしたち二人は

ちいさいから

やがて

仲良しになれるかもしれない

大きなお風呂では 別々だけど

そのあと月の下を二人で歩きたい
道を歩いていくように)

朝、玄関を出るときだ

袋に

太郎を詰めながら

辰子は そう

思っていたのだ

(「石頭」後半全部)

詩「石頭」を、ここまでで全部引用してしまった。

あんまりこんな例は少ないかもしれないが、この詩への愛着をこの詩そのものなしには説明できないと思つたので実行した。

前半の反戦詩「石頭」は、国民的作家ウー・ラツの、生きたかの姿勢がさだまるある場面を切り取つていた。英語の黒い家と黒い屋根に、ウー・ラツも閉ざされる。自分の信念が「まちがって」るかもしれないと感じはじめ、玄関の外に出られなくなる、その様子を描く。

謎のような書きぶりだが、ある状況のもとで、母語(自分の言葉、自分の月)が使用できないことから生じた作家の危機を書いているようにも思える。あの詩はああで、この詩はこう。と、そうやってさばいていけば、もやが晴れて、すっきり整理できるといってもいい。すくなくともこの詩の魅力は謎解きではない。やはりこの詩の魅力は、私にとっては、他で見かけることが極めてまれな、ある態度の形なのだと思う。

七

私はあんまり長い詩を読む場合は注意力が散漫に

なり、一行一行をよく読むということがおろそかになりがちだ。自分では読むたびに熱中して読んだつもりになっている作品でさえ、時間をおいて読むたびにこんなことが書いてあったかしら？と思うことがあるくらいなのである。

詩「石頭」にもそういう部分があった。ちなみに今ほととも大切な部分だと思っている。前半と後半が切り替る地点に置かれてある次の一文である。

■以上の反戦詩「石頭」は公表に際し、次のような好戦詩「石頭」に切り替わる」

詩情も味気もない、まさに置物のような、詩の中に通常は差し込まないような実務的な文。

ここに書かれている事柄は次の二点である。

- ・詩「石頭」が当初、前半の反戦詩「石頭」として準備されたこと。
- ・公表に際し後半の、好戦詩「石頭」に切り替わっ

戦詩「石頭」を捨てて、好戦詩「石頭」のみを公表したことになる。

戦わないことを選んだ反戦詩が

公表に際し

好戦詩に切り替わる意味を

真剣に考えたい

そしてなにより好戦詩のどんな内容が

どんな態度で

公表されなかった反戦詩を包んでいるかを

俺は考えたい

なぜなら俺は

それを読んだからだ

八

好戦詩「石頭」の中の太郎と辰子の触れ合いは、特段いうことが思い浮かばないほど、美しい光景だ。

太郎は「日本の児童」だが、辰子は「一九世紀末のビルマの詩人・背が高い」。

たこと。

この文には、場違いな所に真顔で立っている人のような雰囲気がある。この人(文)は、ここで何をしているのか。感動しているようではなさそう。こういう人は、みんなでお互いに言祝ぎ合い、礼に始まり礼に終わるような、一般的な社交空間では、存在しないことにされてしまうかもしれない。

●この文は、明らかに俺が知っている詩ではない形をしている。というか詩の中にある文というだけで、この部分だけをとりだせば詩とは言えないだろう。ここに書かれたことは、事実とは異なる。なぜなら詩「石頭」には、実際に読めばわかるように、両方の詩(反戦詩と好戦詩)がそれとわかるように提示されているからだ。つまり詩の中のフィクションであり、いわば態度の表明なのだと思う。このフィクションに沿って考えると、前半の反戦詩は存在したが公表されなかった。誰にも読まれることはなかった。詩の作者は、反

太郎は、この詩を大きく動かすことになる、あることをする。それは問いかけだ。しかし太郎の問いかけは言葉によってはなされない。詩をよく読むと、太郎は辰子に話しかけてはいないことがわかる。

辰子自身が、太郎の態度やしぐさを見ることによつて「ぼくは話したよ、君はどう思ったの」と問う声を聴くのである。

そして、辰子は「答えた」。

●ひとは生まれる場所を選べない。偶然どこかの時代と場所をあてがわれて、命のある間は、同じ時間の中を過ごす他の人間の気配を感じながら、あわただしく生きることになる。ただ同じ時間の中に生きなくても、思いを巡らすことで、不思議だが、まるで自分自身がその場所と時間を超えてある生の近くまでいくように感じることもある。

この詩はそのことに触れている。

辰子はウー・ラツではない。でも辰子はウー・ラツに思いを巡らせている。

玄関から外に出ず、口を閉ざしたウー・ラッ。奥さんが代わりに貸本屋を行き来する。ウー・ラッに思いを巡らせることは、ウー・ラッになることでもあり、自分が石頭になっていくこともある。辰子はそう考える。辰子もそのままなら反戦の人になるだろう。

でも一方で辰子は「答えている」。辰子は、口を開けて語っている。太郎のことを見て、自分は問いかけられたのだと感じた辰子に、俺は力を感じる。みなぎっていくような力。あふれていく力。石頭は重く、固く、誰も見向きもしない。それでも辰子は惹かれるのである。そこで口を開けて語りだせば、誰かと争うこともあるだろう。

だが「やがて 仲良しになれるかもしれない」。

太郎が問いかけて、辰子が答えたのだ。

九

詩「石頭」について、考えたことを書いた。

なお荒川洋治は詩「石頭」が「ユリイカ」に掲載さ

れた同月の「現代詩手帖」（一九九九年一月号）に、「石頭」とまったく同じ構成の詩「籠」を発表している。（詩「籠」では前半部が「軍政詩」、後半部は「民政詩」となる。）

既刊詩集には未収録となっているが、詩「石頭」同様、大変面白い詩である。

お見合い

小田原 慎治

「くら寿司」の駐車場でこの人と会った
会ってみたら気違いだった昭和の生まれ
物腰は丁寧な話を海の中にいるように聞いた
誰かに 出会いたい 準備はできてるのに

レーンの動線はその中心に板前が立つスペースを必ず残しているんです
ほらあそこ
はまちが流れていく
こちらからイカ そのあいだ
手前と奥のレーンのあいだ
隙間があるでしょう
そこに板前は立つんです

ゆうべ 爪を眺めていた
そうしたら 急に
別れた男が思い出された
クソ野郎
電車の中の出来事
じぶんにはどうしたって我慢がならないことがある
この野郎にも
そういうことがあるんだろうか
ちがいます 現実として立つんです
いちど立ってみるといい
条件 制約 それらは
板前には関係ありません

港野喜代子を読んだ日

森田 直

港野喜代子という、大正生まれの、関西の詩人がいる。彼女の「凍る季節」という詩を『詩はあなたの隣にいる』（井坂洋子・著／筑摩書房）という本で知り、「この人の詩集を、今すぐ買わなければ」と思った。

でも、もう、ほとんど出回っていないかった。どうやら詩集というのはそういうもので、ほしい詩集があったとしても、古書店を何軒も、何年も巡って、ようやく見つかって喜びひとしお、というような文化があるのだということ、私はこの「極微」の活動で同人たちに出会うまで、よく知らなかった。私は、そんな古書店での詩集探しは、Amazonですべてが揃う世の中へのアンチテーゼのようであった。こいいなと思っている。趣も感じる。でも、いや、「こ

れを読みたい」と思ったときには不便なんだな、と、このとき実感した。自分自身がAmazonの提供する便利さに頼り切り、出版文化の低迷に加担しているかもしれない、という自覚があったので、いちいち落ち込んだりはしないが。

だから結局は、ウェブショッピングで探すことにした。さっそくある古書売買のウェブサイトで『港野喜代子選集』（1981年刊／編集工房ノア）を見つけた。5千円以上の価格にひるみつつ、観念するような気持ちで「購入」をクリックした。

※

届いたその本は、予想の5倍ほど厚い、広辞苑の

ような佇まいだった。箱は焼けて、シミも目立つが、本体はきれいなままで。薄い紺の布張りの上製本。背には美しい銀の箔押しで、書名が刻印されている。ああ、立派な本を買ってしまった。

ズシリと重いその本を手にして、「とても読み切れない」と思った。私は「読み切れない」と思うと、もう1ページも読むことができなくなるから、その本は、長らく部屋のフロアリングに横たわることになった。

私は詩を読むことに、苦手意識がある。数十ページの詩集でも、一息では読み切れず、2〜3回に分けて読む。1回1回に、それなりの時間と、精神力と、忍耐が必要で、そういうチャレンジをする勇氣は、頻繁には奮い立たない。

だから今回、本誌で「詩の論考をやろう」という話になった時、できない、と思った。詩のことを語れるほど、私はたくさん詩を読めない。

「でも、せっかくの機会だ」とも思っていた。1日に1篇読んで、その「感想」を書くくらいなら、

自分にもできるのではないか。それに、こういう厚い本は、ちよつとずつでも、着々と、読み進めていくことが、たぶん、大事なのだ。

そうだ。気が向いた日に1篇ずつ、この詩集の中の詩を読んで、日記のように感想を書けばいい。ちょうど自宅には、最近買ったスキヤナ付きのプリンタもある。毎朝1篇、詩をコピーして、懐に忍ばせて通勤しよう。昼休憩や帰りのバスで、それを読み込み、感想を書こう。

以下はそんな試みをしてみた、4日分の文章だ。結局「毎朝」そんなことは実行できず、半年間のうちの4日分の文章になっている。ただ、そんな有様も含めて、読んでいただけたらうれしく思う。他人が詩をどんなふうに読んでいるのか、私はとても興味があるから、まずは自分のことをさらけ出してみよう。そんな試みになったかもしれない。

上段にはその日に読んだ詩（『港野喜代子選集』から引用）、下段に私の日記を掲載する。引用元のページ数も付した。

靴は大きすぎて

重たい古靴が一足
遺っているのだ

靴は大きすぎて
下駄箱の戸が閉まらないから
靴は常に玄関に出しっぱなしなのに
靴は もうどこへも出かけては行かない
靴は もうどこから帰ってこない
一人の親父さんの生涯の終点が
この一足の靴に棲みついた

今朝は冷える
私は 両の手を
閉まった靴の冷えの中に入れて
両方の手で足音を立てる
帰ってくる足音
出かけていく足音
足音を止めると時間が止み
幼い日の子どもが仔猫を入れた靴になり

こぼん草と泥だんごをのせた靴になり
靴を横に倒すと倒れた時間の中から
死におくれた こおろぎがよろけ逃げる
がぼりがぼり音たてて
靴は長い年月を語る

焼けただれた工場の中を
ずた切れの鉄道線路を
凍てついた風の野面を
大きな敗戦靴の顔の
忍耐づよい足どり
今はひとまたぎの
この小さい土間で
私の両手を履いて
歩きまわる大男

オランダ兵の古の
カンガルー皮の
奇妙な靴

7月17日(金)

東京は雨が降り、気温も低い。近頃は新型コロナウィルスの影響で在宅勤務が続いていたが、今日は出社日だ。くたびれた革靴を履き、出勤した。

私は通勤用の革靴を4足もっている。社会人になりたての頃は、履き潰すまで毎日同じ靴を履いていたが、「複数の靴をローテーションで履いた方が、長持ちするし、お金も浮く」と聞いてから、たくさん靴をもつようになった。

靴を買うときも、本体に靴底を縫い付けてある、本格的なものを選ぶようになった。値は張るけれど、靴底を交換できるから、長持ちするそうだ。そういった靴の作り方には「グッドイヤーウェルトド製法」とか、「マツケイ製法」とか、カッコいい名がついている。これもたくさん靴をもつようになって、はじめて知ったことだ。

一方で、今日履いている靴は、「セメント製法」という、味気ない響きの製法で作られている。かつて私が買っていた、安い靴の生き残りだ。靴底は縫い付けられておらず、ベッタリと接着剤でくっつけられている。大量生産のために開発された製法なのだろう。とにかく安く、味気ない。

それからこの靴は、実際の私の足より、ずっとサイズが大きい。大は小を兼ねる、という感覚で、適当にサイズを選んでいたので。履いていくうちに全体に革が伸び、今はもうブカブカになった。紐を極限まで締めて履いている。その様子も不格好で、あまり履きたくない。

だから雨の日、私はこのセメント靴を履く。早く寿命が来てほしい、とすら思っている。

愛着のないものに対して、こんなふうに思うのもおかしいけど、やっぱり「かわいそうだ」、とも思う。適当に買われ、適当に扱われ、適当に捨てられていくものを、哀れに思う。そして雑に扱っている当事者として、謝りたい、と思う。誰に許してもらいたいのか。そういう無神経に、自分であきれる。

磨いて見て
歩いてみて
抱えてみて

眺めても

何千万人分もの

死の量目が計れず

悲しいことが多すぎるのに

涙も死も 怒りの比重にならずに

量ばかりがせめぎあうこの世を

大きすぎる靴で人ごみをゆっくり

縫い現われてくる筈の

そんな生き方が

ぱったり死んだ

大きすぎる靴を こまめに

私はせつせと磨いてはいるが

軽すぎる骨を埋めに行く日は数えても

重すぎる靴を埋めに行く日は数えられない

五十三才で途中切れた足音を

まことに見ごとでしたと ただ

ほめてあげるわけにはいかない

冷え切った靴の中で

私の手が 指が

少し温まる

この靴は大きすぎて仕舞いこめないから

追憶は投げ出ししておくしかないが

靴は大きすぎて悲劇には向かず

戦前史からも 戦後史からも

はみ出し役が

靴に潜む

〔港野喜代子選集〕1981年／編集工房ノア／P 304・307

「靴は大きすぎて」という詩は、自分の靴ではなく、故人となった夫（もしくは父）の遺した、大きすぎる革靴が主題になっている。

「靴は大きすぎて／下駄箱の戸が閉まらないから／靴は常に玄関に出しっぱなしなのに」とあり、相当の大きさであることがわかる。遺されてしまったその「どた靴」を、「両手」に履き、足音を立ててみると、その靴を履いていた男の記憶が立ちあらわれってくる。そして彼が生きた戦後の、荒涼とした日本の風景が、立ちあらわれてくる。

しかし、どた靴をどんなに磨き、歩き、抱え、眺めても「何千万人分もの／死の量目が計れず／悲しいことが多すぎるのに／涙も死も 怒りの比重にならずに／量ばかりがせめぎあうこの世を／大きすぎる靴で人ごみをゆっくり／縫い現われてくる筈の／そんな生き方が／ぱったり死んだ」

大きすぎる靴は不格好で、馬鹿馬鹿しく、怒りをたぎらせる対象としては多分、向いていない。

今、私はブカブカのセメント靴を履いて、雨の中

を歩きながら、大きすぎる靴の内側と、そこに差し込んだ手のひらとの間の「がぼりがぼり」と鳴る、広すぎる隙間を思う。腹を立てることもできない、無力感や虚しさを思う。無神経な踵が、じんわりと、冷たく濡れるのを感じる。

朝仕度

生まれて はじめての
大きな溜息を ひとこと
―死にたくない―と
そのあと、深く深く
眠ってしまった
永遠の あなたに
まつさらの朝を
さしあげる
勢よく窓を ひらいて
存分に 風を入れて
新聞を まっすぐに置いて
熱い茶を さしあげる
八月六日の あくる日も
八月十五日の あくる日も
私の朝仕度は

空を にらむことから始まる
吐息のつづきや
溜息のくりかえしを
気前よく背負いすぎてきたが
朝ごとの窓は力いっぱい ひらく
風を にらんで
太陽に もの申して
ちり芥を 掃きとばして
冷えた床板を 拭きこんで
ここから とびたつ 石ころに
まつさらの 朝を
さしあげる

〔港野喜代子選集〕1981年／編集工房ノア／P414・415

7月19日(日)

うちには0歳の子がいる。赤ちゃんも朝は辛いらしく、起き抜けに泣くことが多い。何かが不快なかもしれないし、お腹が空いたのかもしれないし、毎朝記憶が飛んでいて、生まれ直した気分なのかもしれない。

赤ちゃんの泣き声ではじまる朝には、親は、心の準備ができていない。携帯のアラームなら、鳴る時間がわかつているが、赤ちゃんの目覚める時間は設定できない。

赤ちゃんをあわあわとあやしたあと、布団を畳み、窓を開け、昨日の夜に作った味噌汁を温める。いつの間にか家を出る時間が来る。または在宅で、仕事を始める時間が来る。だから「朝仕度」というと、毎朝の慌ただしさを思い浮かべる。

でも、この詩の「朝仕度」は、そんなふうに「朝仕度をする」ことではない。「朝を仕度する」ことだ。仕度した「まつさらの朝を／さしあげる」という。

故人に、そして「石ころ」に、まつさらな朝を提供する。

「仕度された朝」からはじまる一日は、気持ちの良いものだろう。怠けたものかもしれない。実家での暮らしを思い出す。一方で、朝を仕度する人は、どんな心持ちだろう。この詩に出会うまで、考えてみたこともなかった。それは恥ずかしいことかもしれない。

一人、空をにらみ、風をにらみ、太陽にももの申す。抗えない理不尽への怒り、だろうか。ちり芥を掃き、床板を拭きこむ。朝はもともと、まつさらではないのだ。私が子どものころ、まつさらだと思ってきたいくつもの朝が、誰かによって磨かれてきたものだと思いがた。

昨夜ほったらかした生活の塵で、うすく濁った朝を、今は自分で磨かなければいけない。

家々がチヨロ／＼燃え出して
 後には黒い森が座り
 森の後は紺色の山なみがゆれ
 山なみの後はねずみ色の雲の巻き巻
 その後は真紅なねりぎぬ
 真紅の後は、もう
 底無しの海色
 こどもが見たつて
 大人が見たつて
 底なしの底なし
 その世界

そんな景色のそんな時間が急に怖く
 じつと立って いられないで
 電車にとび乗つてしまつた
 電車は空つぽであるくせに
 私一人を振り墜とそうとばかり

ダダン／＼横ふりにとび走つた

〔港野喜代子選集〕1981年／編集工房ノア／P 64・65

東京はすっかり秋。長袖のシャツでも肌寒くなつた。秋は、一番好きな季節だ。暑くも寒くもなく、風も強く吹かない。

人生は山あり谷あり、というけれど、できれば平坦な人生を送りたい。高ければ高い壁の方が登ったとき気持ちいい、というけれど、できるなら壁など登りたくない。

でも、誰の作為でもなく、大抵の人生には山があり、しかるべくして谷がある。それならば楽しんでしまえ！という人間がいるのも仕方なくて、そういう人が世の中を動かしているのかもしれない。だからその影響を受けない人生もありえないし、たまには壁を登らないといけないし、「高い壁の方が気持ちいいですね！」と言わなければいけない場合だつてある。生きていけば。

秋の夕方の空は澄み切っていて、底が見えない。どんなに逃げたくても、遠ざからない恐怖が、この

詩の空には貼り付いている。

およそ70年前の、おそらく関西の夕方の風景は、無人で、無言で、今、私の目の前に広がる、マスクをした人で混み合った東京メトロの車内とは、似ても似つかない。

けれども、何人もの人が死んだこの網目上の管の中を毎日移動する人々の体内のどこかにも、秋の空がある。揺れの少ない新型車両の吊り革にぶら下がり、振り落とされまいかと脚をすくめる。日没も見えない、空の狭い町に帰る。

凍る季節

風が咆え

今朝は

一椀の麦雑炊のために

子を背に、脇に連れて行列についた

その点線の半ばで夢は消えました

一と朝だけ、うずくまったままで居たいと

朝毎、ひそかに思うのさえ

危いのだ

行き倒れなのだ

と自分を叱るので

見つめる 一点、一点が放射路にのびる

まばゆい真昼になつた

今、ここで眠つてしまえばとて

凍え死なのです

(「港野喜代子選集」1981年／編集工房ノア／P 356・357)

12月25日(金)

11月から、何度も高熱が出た。そのたび近くの内科に行き、薬をもらい、PCR検査を受け、それでも喉が痛むので、鼻から管を通して診てもらおうなど、いろいろしてみたけれど、熱は上がったり下がったり、コロナでもいつもの風邪でもなく、弱っていた。

3度目のPCR検査を受けさせられそうになり「もっとちゃんとした検査を受けたい」と言ったら「もっと大きい病院に行つて」と言われた。大きい病院で診てもらったら、それなりの肺炎だった。「あなたが70歳なら入院だ」と言われた。

ただふつうに生きていたとしても、人は死んでしまふのだ。そんなことに気づいていても、気づかないようにして生きているのだ。職を失った人がいる。家を失った人がいる。そして今は、こんなに寒い冬なのに、気がつかないようになつて生きているのだ。肺炎は、抗生物質でよくなった。咳だけがむなし、数カ月は続くという。

落ちる

森田 直

使い慣れていくことに
コップの とっては なめらかになり
ある時点でふいに
もつことができなくなる

もうなんどもおきたことなのに
落ちていくそれを
いつもすくうことができない

手を離れた立体は
まるでおたがいをしらなかつたころのようにつくしい眼をしてとおざかつていく
もうつりあうことのない重さで床を打ち
円状に開き切って

思い出はたいてい鋭くて
ひろいあげると血が出る